

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12857

研究課題名（和文）ビザンティン写本挿絵に見られる註解的機能の分析 聖堂装飾との関連において

研究課題名（英文）An Analysis of the Commentatorial Function of Byzantine Psalter Illustrations

研究代表者

辻 絵理子 (Tsuji, Eriko)

埼玉大学・人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：40727781

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：これまで精緻な検討が行われていなかった写本の挿絵と本文の関係、同じ箇所挿絵を有する詩篇写本の構成を比較検討し、全銘文を訳出する論文を、継続的に発表している。これは1927番の研究に留まらず、挿絵を持つビザンティン詩篇写本の全ての再検討となる。また、カッパドキアのトカル新聖堂、北小祭室を中心とした装飾プログラムについての論文を、ライデンから出版された単行本で英文にて発表した。年度内には収まらなかったが、2024年5月に開催された国際シンポジウムでは、テサロニキのアギオス・ニコラオス・オルファノス聖堂について発表した。その内容を英語論文にまとめたものが同年度内刊行予定の雑誌へ掲載が決まっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

上記の成果は挿絵を有するビザンティン詩篇写本の総合的な研究であり、曖昧な典拠を持つ図像の本文との関係を分析していく上で不可欠なデータを積み重ねる論文を継続的に発表していることは、図像及びテキストの今後の研究に大きく寄与するものであると考える。また本研究期間中、半分は現地調査に行けなかったため、英語での発表を口頭、論文ともに行ったことが、読者を増やしたのみならず、大家と呼べる海外研究者との交流のきっかけにもなった。カッパドキアのトカル新聖堂の論文はスパタラキス元教授、テサロニキのオルファノス聖堂の発表と論文はセモグルウ教授から非常に有益なコメントを頂き、交流を続けている。

研究成果の概要（英文）：I have been publishing a series of articles in which I compare the relationship between the text and all the illustrations in the manuscripts, which have not been examined in detail, and the composition of the psalter manuscripts with illustrations in the same places, as well as translating all the inscriptions. This is not just a study of the Cod. Vat. gr. 1927, but a re-examination of all the Byzantine Psalter manuscripts with illustrations. I also published a paper in English in a book on Cappadocia published in Leiden on the new church of the Tokali Kilise and the decoration program centered on the Prothesis. Although it could not be completed within the fiscal year, I made a presentation on the Cathedral of Agios Nikolaos Orfanos of Thessaloniki at an international symposium held in May of this year. The content of the presentation was compiled into an English paper, which will be published in a journal to be published within this year.

研究分野：ビザンティン美術

キーワード：ビザンティン美術 西洋美術史 キリスト教図像学 写本挿絵 聖堂装飾

1. 研究開始当初の背景

ヴァチカン図書館ギリシア語写本 1927 番 (以下「1927 番」) は、旧約聖書の『詩篇』を本文とし、テキストの間に 100 以上の図像を有する、12 世紀前半に制作されたビザンティン美術を代表する作例のひとつである。ビザンティン世界の詩篇写本には、旧約聖書である本文に対し、新約聖書や他の典拠に基づく挿絵を描く複雑な機能を持つ作例があるが、1927 番もまた、他に類例のない多様な挿絵を持っている。

研究代表者は、様々な研究で言及されるものの、単独では研究されてこなかった同写本の基礎的な研究を、2018-19 年度研究活動スタート支援を受けて行った。本研究は、そこで得られた成果を更に進展させ、現存する関連写本の図像、及び聖堂装飾プログラムとの関連性を分析するものである。同写本の全体像を明らかにするだけでなく、写本挿絵と聖堂装飾という、ジャンルを超えた図像の比較検討を行うという、これまでにない試みであった。

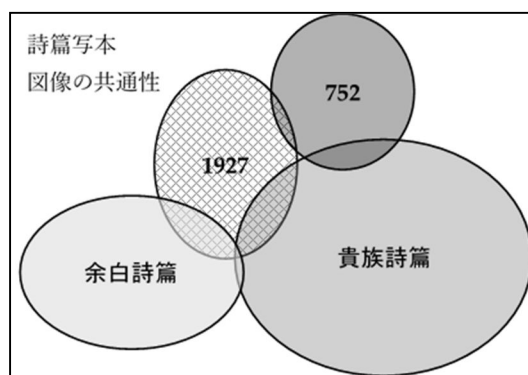
ビザンティン美術史における詩篇写本研究は、1970-80 年代に相次いでモノクロ図版が出版され、イコノクラスムとの関連などを探る個別の検討が進められた。収録された図版が挿絵部分のみだったこともあり、挿絵自体の図像学的研究は行われたが、挿絵と本文の具体的な関係や、写本のレイアウトの意味などは未だ考察されていない。特に全頁大の挿絵を持つ詩篇写本研究については行き詰って久しく、欄外に註として書き込まれたテキストの、神学研究における成果を待つ状態となっている。1927 番は本文の間に挟むかたちで挿絵を描く写本だが、図像の多さと内容の複雑さ、類例の少なさから、先行研究は乏しい。近年国際シンポジウムが開催され、神学や歴史学の立場からも注目を集めているヴァチカン図書館ギリシア語写本 752 番 (以下「752 番」) との関係が指摘されているが、どちらも所蔵館において最重要指定を受けた貴重書であり、キリスト教図像学研究において未知の領域を開拓し得る重要な作例にも拘わらず、写本全体の総合的な研究は未だ行われていない。

本研究の核心をなすのは、1927 番に描かれた図像は、どこまで本文である旧約聖書詩篇と (文章は書きこまれていないが、描かれた図像の直接的な典拠である、新約聖書や聖人伝などの) 外部テキストを結んでいるのか、そうした典拠は一体どのような意図に基づいて採用されたのか、そのような意図を踏まえた図像は、他の写本や聖堂装飾においても見られるのか、という三つの問いである。はこれまでの研究において幾つかを明らかに出来たものの、引き続き時間をかけた分析が必要な問題である。曖昧な歌の集積である詩篇写本に描かれた挿絵は、本文以外の新旧約の様々なテキストに由来している。ここでは図像は、本文をそのまま描き、彩るといった類のものではなく、本文を解釈した註解として機能している。あたかも初めから完成品しか存在しなかったかのように、ビザンティンの詩篇写本は揺籃期と呼べる作例を残さないが、全 151 篇のテキストはそれぞれ、新旧約の様々なテキストや神学的著作を踏まえて解釈され、多様な図像が施されている。こうした写本の制作には、非常に高度な神学知識を有した人々が関わっていたことは明らかである。写本本文と図像の結びつきを、典拠と併せて明確にし、現存する他の作例の関係性を明らかにすることを試みた。

2. 研究の目的

ビザンティン詩篇写本は長い間、全頁大挿絵を持つ豪華な「貴族詩篇」と、余白に多数の挿絵を描き、複雑な機能を有する「余白詩篇」のふたつに分類されてきた。本研究の中心となる 1927 番、及び 752 番は、そのどちらにも属さない形式を持ち、独立した作例として別個に扱われてきたが、申請者はかつて、1927 番と余白詩篇、及び貴族詩篇との間にも関わりがあることを明らかにし、更に、分断されてきた貴族詩篇と余白詩篇との間にも共通性があることを示した。そのような成果を経て、注目されつつも単独で扱われてきた 752 番もまた、1927 番や貴族詩篇との関わりの中で、一部の図像を説明出来るようになるようになった (図参照)。

本研究は、世界で初めての 1927 番に関する総合的な研究たるに留まらず、「余白」や「貴族」といった分類のくくりを超えて、詩篇写本挿絵を総合的に分析する。本文のジャンルを超えた写本群との比較を行ったため、旧約詩篇研究や神学研究にも寄与し得るだろう。本研究の更なる独自性は、そのようにして得られた成果を、聖堂装飾研究に活用するというものであった。



3. 研究の方法

詩篇写本を中心に、旧約聖書と新約聖書の内容を挿絵によって関連づけている箇所を明らかにし、その典拠となる神学テキストと併せて検討することで、中世キリスト教世界における正教圏の神学的解釈を実証的に指摘した。この成果は美術史学研究のみならず、神学研究、歴史学研究にも寄与し得る。ビザンティン美術史研究は現存作例の乏しさ、史料の少なさがネックとなるが、それは美術史学に限らない。そのため他の時代や地域以上に、複数の学問分野を横断するかたちで研究を進めていくことが不可欠であり、先のシンポジウムでも美術史学、神学、歴史学、文学といった諸分野の研究者が参加した。しかし未だ基礎的な研究すら完了していない状態である。また、752番の欄外註（主にエルサレムのヘシュキオス）については、ストックホルム大のB・クロスティーニを中心とした校訂版・翻訳計画が告知されたが、その後動きがない。1927番の本文と図像、そして関連テキストを総合的に扱う本研究計画の実施は、一冊の写本のみならず、752番をはじめとする他の写本研究への手掛かりにもなるだろう。

4. 研究成果

研究期間の前半であった2020年度、及び2021年度については、研究成果の一部について論文を投稿し、会場とzoom配信を併用した口頭発表も行ったが、感染症に伴う渡航の制限やロックダウン等により、予定していた海外における現地調査（ヴァチカン図書館をはじめとする海外図書館写本室におけるオリジナル調査、ギリシア、トルコ等における聖堂調査）については、一切行うことが出来なかった。そのような状況の中で発表した論文と口頭発表については、基礎的な部分を固め始めることはできたと思われる。これまで精緻な検討が行われていなかった写本の全ての挿絵と本文の関係、及び同じ箇所に挿絵を有する詩篇写本の構成を比較検討し、地道に記述していく作業については、紙幅の制限から一本の論文にまとめることは困難であるため、今後も継続して、全ての該当箇所を終えることを本研究計画期間中の目標とする。研究において不可欠であるものの、膨大な文字数となり、どうしても続き物となってしまう論文を発表できる場所は非常に限られるが、所属機関の紀要で受け入れられたため、得られたデータや知見をまとめ、オンラインで公開していくことが可能になった。こちらについては、基本的に年2回ずつ公開しており、研究期間後も継続していく。

2022年度は、前年度までと異なり海外におけるまとまった期間の現地調査が可能となったため、トルコ、カッパドキアでの聖堂調査を行った。現地に詳しい専門家の助力を得て、未発表の聖堂を含めた様々な壁画の調査が叶った。同年度に、ライデンのAlexandros Pressから刊行された単行本でカッパドキアのトカル新聖堂、北小祭室を中心とした装飾プログラムについての論文を発表したが、その箇所を現地で確認し、自説の補強をすることが出来た。

最終年度であった2023年度は、現地調査としてはキプロス島に残る聖堂の現地調査を行った。ラグデラのパナギア・トゥ・アラカ聖堂やアシヌウのパナギア・フォルピオティッサ聖堂をはじめとする優れたフレスコ画が残る聖堂群を訪れ、写真撮影や壁面配置の確認を行った。この調査で得られた成果を全て発表することは年度内に収められなかったが、本計画全体を通して行ったものとしては、計画そのものの基盤となる写本調査とその成果の発表を継続したこと、関連する聖堂の現地調査を可能な限り行ったこと、またその成果の一部を海外で出版することが叶ったと言える。前半は社会状況に非常に困難を覚えたが、総合的には現地調査と成果の発表は順調であったと言ってよいだろう。また、本研究期間内には収めきれなかったが、本研究の成果の一部も含めた内容を、ギリシアからの招聘研究者を交えた国際シンポジウムで2024年5月に口頭発表した。また、こちらの内容を英語論文にまとめたものが、同年度内に刊行予定の雑誌へ掲載が決まっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 辻 絵理子	4. 巻 58-1
2. 論文標題 ヴァティカン図書館所蔵ギリシア語写本1927番 第29～41葉に関する記述	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要. 教養学部 = Saitama University Review. Faculty of Liberal Arts	6. 最初と最後の頁 99～108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24561/00019745	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 辻 絵理子	4. 巻 58-2
2. 論文標題 ヴァティカン図書館所蔵ギリシア語写本1927番 第42～51葉に関する記述	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要. 教養学部 = Saitama University Review. Faculty of Liberal Arts	6. 最初と最後の頁 79～85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24561/00019918	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 辻 絵理子	4. 巻 59-1
2. 論文標題 ヴァティカン図書館所蔵ギリシア語詩篇写本1927 番第52-55 葉に関する記述	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要. 教養学部	6. 最初と最後の頁 67～73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24561/0002000179	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 辻 絵理子	4. 巻 57-1
2. 論文標題 ヴァティカン図書館所蔵ギリシア語詩篇写本1927 番第3-10 葉に関する記述	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要. 教養学部 = Saitama University Review. Faculty of Liberal Arts	6. 最初と最後の頁 55～65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24561/00019422	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 辻 絵理子	4. 巻 57-2
2. 論文標題 ヴァチカン図書館所蔵ギリシア語詩篇写本1927 番第12-24葉に関する記述	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要. 教養学部 = Saitama University Review. Faculty of Liberal Arts	6. 最初と最後の頁 71-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24561/00019543	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 辻絵理子	4. 巻 56-2
2. 論文標題 ヴァチカン図書館所蔵ギリシア語写本1927番 第1~2葉に関する記述	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要	6. 最初と最後の頁 97-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24561/00019238	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 辻絵理子
2. 発表標題 タブローに収めた重層性 ビザンティン詩篇写本に描かれた士師記とマタイ伝
3. 学会等名 早稲田大学美術史学会春季例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Eriko TSUJI (Ed. by Tomoyuki Masuda)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Alexandros Press, Leiden	5. 総ページ数 472
3. 書名 Byzantine Cappadocia (The Communion of Marys - The Programme around the Prothesis in the New Church of the Tokali Kilise, Goreme No.7, pp.155-168)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------